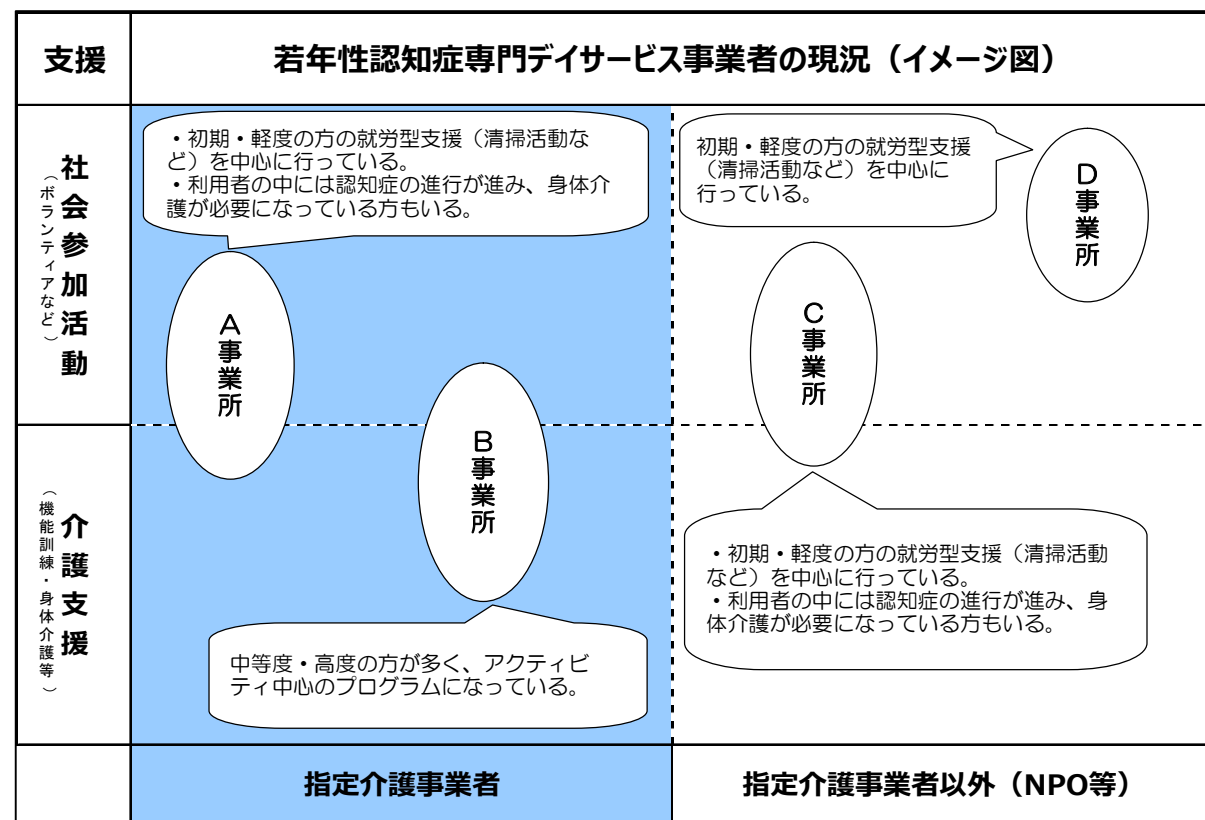


# 若年性認知症の人の「居場所」に関するこれまでの検討と今後の論点

## 若年性認知症の人の「居場所」の現状



### 現状

- ・都が実態を把握した都内6箇所の若年性認知症専門デイサービス事業者では様々なサービス・支援が提供されている。
- ・指定介護事業所では、介護保険事業として、介護支援及び社会参加活動のサービスが提供されている。
- ・指定介護事業所以外では、自主事業として、社会参加活動のみを行っている事業所と、一部介護支援もあわせて行っている事業所もある。
- ・事業所の中には、社会参加活動に重点を置いている事業所と、介護支援に重点を置いている事業所がある。
- ・一方で、社会参加活動に重点を置いている事業所の中には、利用者の認知症の進行により介護支援中心の支援に切り替えざるを得ない事業所もある。
- ・このほか、都内の約800箇所の指定介護事業所で、若年性認知症利用者受入加算を取得している。（平成24年7月1日現在）

### 論点

- ・若年性認知症の人の「居場所」は、介護保険サービスの提供を主体として考えるべきか。
- ・若年性認知症の人の「居場所」に対する、介護保険以外の公的支援の必要性について。
- ・利用者の認知症の進行によって、事業所間での移行や高齢者デイサービス事業所への移行などの仕組みを整える必要があるのではないか。
- ・現行の介護保険制度・介護報酬の見直しが必要ではないか。

## 第16回東京都認知症対策推進会議での意見交換

### ジョイントの活動・取組

- ・記憶障害等の症状に着目するのではなく、記憶障害があるけれども、「本人の思い」や「これからどうしたいか」ということに最も大きく焦点を当てることを考えている活動している。
- ・来ている目的をはっきりさせないと嫌気が差してしまう。ここは「社会参加をして、頭をさびさせないための場所」という目的と、「自分だけで頑張らなくていい」と約束を明確にしている。
- ・介護支援ではなく、本人支援。身体能力の健全さから社会的に交流することを主軸に活動している。
- ・本人を信頼して、能力を引き出すこと、チャレンジの機会を提供すること。
- ・認知症でありながら、自立性をもてる場所が居場所ではないか。

### デイホーム太子堂-ともに-の活動・取組

- ・その人らしく安心して過ごせる場所を提供し、一人ひとりの状態に応じた支援を受けられることを目的とする。
- ・家族会を組織し、地域への啓発活動を行う。
- ・人生史により、生活歴や趣味などを把握し、本人にも輝いていた時代を思い出して、自信を取り戻してもらう。
- ・認知症の診断初期は、社会、会社、家族などのグループへの帰属欲求が強く、介護という視点ではなく、本人の欲求を支援するという視点が必要である。
- ・本人支援では、実行機能・記憶障害の改善、自主性の尊重、社会とのつながりを大切にしている。
- ・職員には、若年性認知症を正しく理解すること、本人の状態に応じた支援を行うことが求められる。
- ・必要性があっても収益性が望めないと、サービスが展開しにくいという現状もある。
- ・新規の相談があっても、送迎ができないことがネックとなって利用につながらない場合もあるので、加算のあり方や移動支援などについても支援があるとよい。

### 意見交換

#### 【利用者本人の思い】

- ・カルチャースクールのようなゆとりはなく、本人は自分の行き場を求めて必死だったり、一日をどう過ごすかということに必死に考えたりしている。
- ・本人の不安は強く、「どこに連れて行かれるのか」という不安からはじまる場合が多い。何回か通所して落ち着いてくると安心感に変わってくる。
- ・利用者は用意された枠組みで活動するほうが入りやすい。
- ・本人は、仕事がしたいというよりも、行く場所がほしい、安心できる場所がほしい、というニーズがある。

#### 【サービス・支援の枠組み等】

- ・事業者の専門性により、サービス内容が異なる。介護保険サービスと介護保険外のサービスとで、どちらがよいという訳ではない。
- ・個人それぞれで、必要なサービスを利用すればよい。
- ・情報提供のもとに、必要なサービスを選べるようにする。

#### 【事業者への支援】

- ・費用面の支援としては、やり方はそれぞれに任せた上で、クオリティーを公的にコントロールして、それなりの評価ができるところに助成をする程度の策しかない。
- ・高齢者と若年の違いによる問題等を勉強し、職員数や支援内容によって加算も段階的に変えるなど、段階的な加算となる制度とする。